論文

旧三潴銀行の建築保存研究

その２．輸入金属製打出天井板について

Architectural Investigation for the Restorative Preservation of the Former Mizuma Bank

Part 2. Tracing the Import Stamped Metal Ceiling Boards

工藤　卓[1)]
Takashi KUDO

Abstract: This second essay focuses especially on the stamped metal ceiling boards found in it. As a result, the boards prove to be similar to the products imported from Australia in the latter half of Meiji by Fujiwara Shoten, a building material dealer in Tokyo. The products were especially used in the buildings designed by Japanese famous designers form Meiji 40(1907) to 43: in the former Marquis Maeda' s Mansion (completed in Meiji 40) and the Navy Museum (in Meiji 41) in Tokyo, designed by Mamoru Watanabe, and in the former Teikichi Tanabe's Mansion (in Meiji 41) in Hyogo, designed by Magoich Noguchi. In Fukuoka, where the former Mizuma Bank is located, the products were also used in the Guest House of the former Fukuoka Public Hall (completed in Meiji 43) designed by Eizaburo Sanjo. From these facts, the designer who used the stamped metal ceiling boards in the former Mizuma Bank, can be presumed to be Eizaburo Sanjo himself.

キーワード: 金属製打出天井板
Keywords : Stamped metal ceiling board

１．はじめに

論文「その１」では、旧三潴銀行は多様な建築的特性を併せ持つ歴史的建造物であることを明らかにした。また、建築設計者像として福岡県土木課技手西原吉治郎を推察した。本論文「その２」では、「金属製打出天井板」に焦点をあて、この装飾美術的工業製品を用いた室内意匠とその特性を鮮明にするとともに、この製品導入に携わった設計者像を推察する。

「金属製打出天井板」は、英国のアーツ・アンド・クラフツ運動ないしは西欧のアール・ヌーヴォーの影響を受けた図柄が金属加工されている工業製品であることに、大きな特色がある。

明治後期の日本の洋館建築の天井を飾ったこの金属製打出天井板について、これまで希少性の高い歴史資料として抽出した論考はない。現時点においてこの天井板を実際に見ることは容易ではないが、同じ明治末期に竣工した「旧三潴銀行」と「旧福岡県公会堂貴賓館」で目の当たりにすることができる。

２．旧三潴銀行の金属製打出天井板

煉瓦造2階建洋館の旧三潴銀行は、福岡県大川市の築後川河口近くに明治42年10月に竣工している[1)]。この建築の室内意匠で特筆されるのは、倉庫と金庫室をのぞく全ての天井が金属製打出天井板で装飾されていることである（図1-1、1-2）。

平成８年の調査時点に於いては、頭取室の天井蛇腹は古典系植物文様をアール・ヌーヴォーの図柄にして連続させ、天井板は古典系幾何学文様の図柄を配列していた（図1-7）。これらの図柄は、建築外観を飾る古典系ルネサンスとアール・ヌーヴォーの装飾に呼応して選ばれている。 吹抜空間の営業室天井では、四周に廻された植物の葉をかたどった金属製打出蛇腹板はよく残されているが、天井面は蛇腹と同じ文様が打出された中心飾りだけが残されていた（図1-3）。しかしこの天井全体に金属製打出天井板が張られて白く塗装されていたことは、この建築を譲り受けた元所有者の真崎悟氏から教示いただいている。2階会議室の天井も同様に、装飾のある天井廻縁装飾は残るが天井板は改造されている。

階段バルコニーの天井板（図1-6）や、1階応接室天井板（図1-4）、事務室天井板（図1-5）および廊下天井板は比較的良く残されている。これらは2階頭取室の装飾文様とは違って、草花や幾何学形の図柄が平面構成された瀟洒なものが選ばれている。

このように、蛇腹と天井板は、部屋の広さや天井の高さ

1)　近畿大学産業理工学部建築・デザイン学科　教授　kudotaku@fuk.kindai.ac.jp

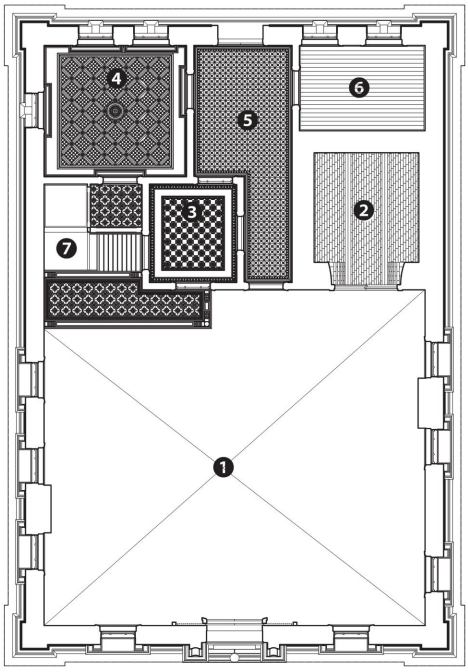


図1-1：１階天井伏せ図
❶営業室　❷金庫室　❸事務室　❹応接室　❺廊下
❻倉庫　❼階段

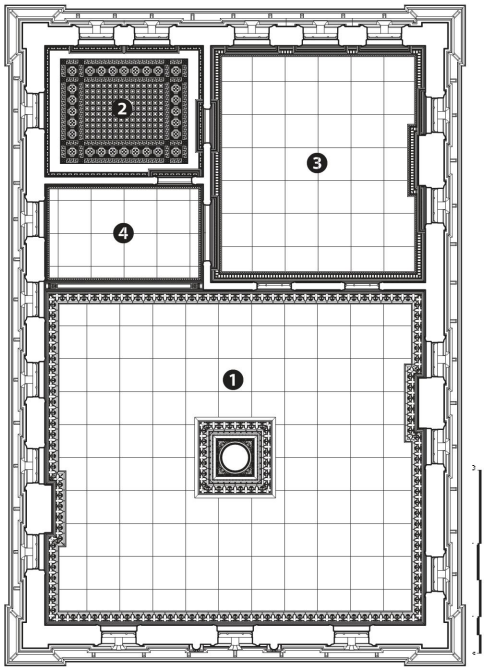


図1-2：2階天井伏せ図
❶営業室吹抜　❷頭取室　❸会議室　❹階段

図1-3：営業室吹抜の中心飾

図1-4：応接室天井

図1-5：事務室天井

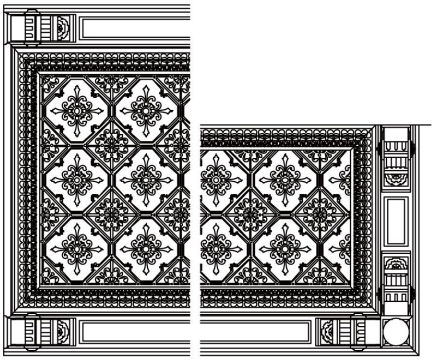


図1-6：階段バルコニー天井

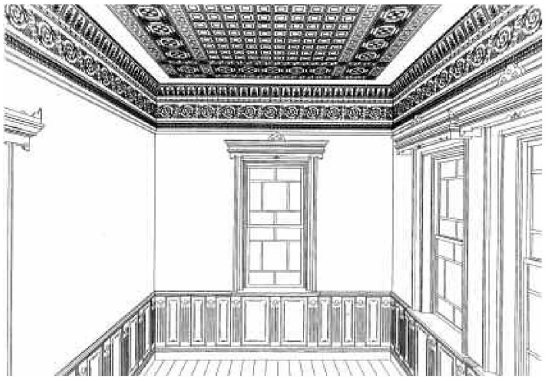


図1-7：頭取室

図１：旧三潴銀行の金属製打出天井板

図2-1:（『建築雑誌』第231号より複写転載）

図2-2:（『建築雑誌』第262号より複写転載）

図2-3:（『建築雑誌』第277号より複写転載）

図2-4:（『建築雑誌』第286号より複写転載）

図２：藤原商店の金属製打出天井板広告

を考慮して選択されている。いずれの天井板も、90センチ四方をモジュールとした単板である。この天井板について、大川市史では、「天井はドイツ製の厚い鋳型打ちブリッキを使った」[2]と記述している。しかし実際は、薄い亜鉛引き鉄板を成型した工業製品である。

３．金属製打出天井板を輸入一手販売した藤原商店

金属製打出天井板は、明治後期に建築素材販売元の藤原商店が取り扱っていたことを、建築学会の機関誌「建築雑誌」の広告頁の中に見付けだすことができた（図２）。

明治39年の「建築雑誌」第20輯[3]には、「業務擴張廣告」と銘打った建築素材が紹介され、「宮内省陸海軍省及諸官衙御用品」の一つとして「濠州製鋼鐵製特許天井板」が一行見出しで広告されている（図2-1）。

この広告内容をより拡充するのは明治41年の「建築雑誌」第262号[4]の広告紙面からである。そこには天井板と中心飾りの写真を載せて、「一見精巧なる刀手に依りて彫刻せられたる如く高尚優美なり」とその魅力を強調している。また、この広告が貴重なのは、使用先の建築名を列記していることである。「海軍参考品陳列所（原典のまま）」「東京市圖書館」などの公共建築物、「前田侯爵邸」「長谷川寫眞館」など民間の洋館など14の建築物が列挙され、その他にも「勸業博覧會諸建築物」が使用先として広告されている（図2-2）。

明治43年「建築雑誌」第24輯第277号から281号[5]までは、「近来大流行の濠州製鋼鐵天井の美觀」と説明書きのある写真を載せた一頁広告を掲載して、東洋一手販売の藤原商店を強調している（図2-3）。ただし、この号以降は、このような大々的な広告は見られなくなり[6]、金属打出天井板広告は他の商品と同じ一行見出し扱いになっていく（図2-4）。

第24輯の一頁広告文の製品紹介は、金属製打出天井板の特徴をよく現しているので、その全文を下記に示す。

!!!濠州ワンダーリック會社製品

鋼鐵製打ち出し天井板及内外装飾品!!

○該材料は歐米諸國制作中の粹を抜き英を萃め夙に斯業界冠たる好評を博せり

○該材料は精巧完美にして高尚優美且つ廉價なるを以て各技術家の競うて之れを使用するに至れり

○該材料は東京日比谷圖書館、鐘淵紡績娯樂室、海軍参考品陳列館、帝國ホテル、京都村井邸等に用ひらるゝを以て其實用を示せり

○該材料は神技妙工を望まるゝ人には彼の千古名匠左甚五郎の妙技も尚容易に及ばざるの模型あり

○該材料に取付くるに其接續の容易なる唯僅かに數本の釘を以て其繼目に打ち全面其符接を認めしめざる可し

○該材料は優雅高尚なる金青白黄其他嗜む所に施彩し得るが故に彫刻石膏の如し

○該材料は一坪四五圓より五六十圓の各種階級あるも普通六圓乃至九圓のもの販路最も多し

この広告文の前半からは、業界から好評を得ていること、優美で廉価であることから多くの技術者に使用されていること、公共性の高い建築や私邸での実績などが紹介されている。後半には、継ぎ目が目立たず数本の釘で取り付けできること、彩色できること、坪あたり45円から60円の各種階級のものがあることなど、製品カタログの内容をよく伝えている。

4．藤原商店広告の使用先にあげられた洋館建築

（表）

藤原商店広告の「金属製打出天井板」の使用先として上げられている「帝國ホテル」は明治23年(1980)に竣工している。設計者は渡邊譲（1855～1930）である。渡邊は、工部大学校造家学科第2回（明治13年）の卒業生で、明治19年に妻木頼黄らとともに政府の建築技術者養成ドイツ留学生に選ばれている。その帰国直後に設計した「帝國ホテル」で金属製打出天井板を使用したことにこの製品の新しさが分かる。

「海軍参考品陳列館」は明治39年1月に築地海軍大学校内において起工、同41年4月に竣工している。この設計も渡邊譲である。明治41年の「建築雑誌」に『各室天井は總て藤原商店の一手販賣に係わる「ウンドリック」會社製金屬打出天井板を用ひ』[7]云々の解説が載せられている。また「明治工業史」建築編にも、同様の解説文が載せられ[8]、金属製打出天井板が公共公開施設の天井に使用された製品として、建築工業史に残る評価を得ていたことが伺える。

「前田侯爵邸」のルネサンス式西洋館もまた渡邊譲の設計である。「海軍参考品陳列館」よりも以前に起工されていたが日露戦争のため工事中断していたこの邸は、東京本郷の加賀前田藩の上屋敷跡に、総面積約214坪で建てられ、天皇の行幸を仰ぐために内装・家具も上質に設計されて明治40年5月に竣工している。明治41年の「建築雑誌」には次のように解説されている。『便所は一階二階とも（中略）天井は「ワンデルリッチ」會社製打出シ模様鋼鐵板を用い「ペンキ」塗りとし床及腰羽目には舶來「タイル」を貼用し周壁は白漆喰塗りとす』、続いて『地階に於ける轉球室、喫煙室、暖房其他各室とも入り口窓枠建具及腰羽目等は総て檜製にして「ペンキ」塗りとし天井は轉球室喫煙室等の主要なる各室は「ワンデルリッチ」會社製打出し模様鋼鐵板張りとし』とある[9]。この記事からは、「都内各所に設けられた華族・貴族・ブルジョアジーの邸宅のなかでも第一級と認められる」[10]洋館において、藤原商店が取り扱う金属製打出天井板が張られたことが分かる。つまり渡邊譲は、このような格式を重視する大邸宅において、単に西洋様式の完璧だけではなく，当時最新の暖房や照明などの設備の導入とともに、アール・ヌーヴォーによる装飾美術の新素材としてこの金属製打出天井板を用いていたのである。

「日比谷圖書館」の金属製打出天井板は、明治41年の「建築雑誌」の叢録時報に紹介されている。「今度竣工したる日比谷公園内の市立圖書館は工學士三橋四郎氏の設計にて昨年七月の起工に係わり（中略）、階上閲覧室は装飾最も美観を極め中央にコリント三葉式の圓柱二本あり、釣燈は六個を備え周圍にはローマ式の大窓牖を開け打抜鐵板を以て張れる格天井はワンダリック會社の製なりという（中略）云々」[11]とある。ここでも藤原商店が輸入した「ワンダリック會社」の天井板が、公共性の高い図書館の閲覧室を飾って注目されている。

表：藤原商店広告に載った設計者と竣工年が判明する建築

建築名	設計者	竣工
帝國ホテル（初代）	渡邊譲	明治23年(1890)
南葵文庫（旧徳川頼倫邸）	石村金次郎	明治32年(1899)
鎌倉海濱院ホテル	ジョサイア・コンドル	明治39年(1906)
前田侯爵邸	渡邊譲	明治40年(1907)
海軍参考品陳列館	渡邊譲	明治41年(1908)
日比谷圖書館	三橋四郎	明治41年(1908)
旧田辺禎吉邸	野口孫市	明治41年(1908)
京都村井邸	J・M・ガーディナー	明治42年(1909)

「京都村井邸」洋館は、明治42年に竣工したルネサンス風の鉄骨石造3階地下1階建で、タバコ産業の近代化を推し進めた村井吉兵衛の別荘である。設計者は在日アメリカ人建築家ジェームズ・マクドナルド・ガーディナーである[12]。

5．文献上に見る金属製打出天井板が張られた洋館建築

藤原商店の輸入先である濠州では、金属製打出天井板はどのように使われていたのであろうか。明治41年の「建築雑誌」叢録の田辺淳吉が抄訳した「西濠州の住宅」[13]を見てみる。原文は英国の建築雑誌に掲載された[Domestic Architecture in Western Australia]で、パース在住の建築家が英本国に向けて投稿した記事である。そこには、一般住宅を例にとって「天井、壁は白漆喰だが壁紙を使用しているのもないではない（中略）上等の部屋には金屬製打出天井（スタンプトメタルシーリング）にペンキを掛けて使用したのもある」と明瞭に金属製打出天井板の使用例が紹介されている。この天井板が藤原商店が輸入した製品と同じものかどうかは判明しないが、同類の天井板であることは明白である。

図３は、住友銀行の初代支配人なども務めた田辺禎吉邸の応接室の天井である[14]。設計者は野口孫市である。野口は、明治2年に姫路市で生まれ、同27年に東京帝国大学工科大学造家学科を卒業して同32年に住友営繕に入社、住友関係の多くの建築と邸宅を設計している。兵庫県住吉の「旧田辺禎吉邸」はその中でも秀麗な住宅であり、明治41年に竣工している。花をモチーフとした装飾文様の金属製打出天井板は、格縁に囲まれた鏡板に用いられ、天井全体がアール・ヌーヴォーと共通する洗練された美意識をみせている。野口が住友入社直後に英国のヴィクトリア朝末期の建築を視察していた時期は、ちょうど、アーツ・アンド・ク

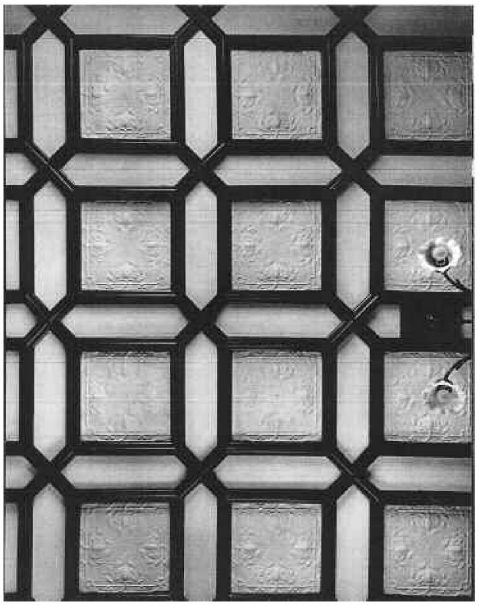


図３：旧田辺禎吉邸食堂天井 （『日本の建築〔明治大正昭和〕』より複写転載

図４：旧島根農工銀行本店天井 （『洋館意匠』より複写転載）

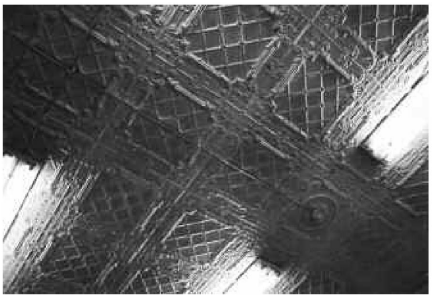


図５：埼玉県本庄市理髪店天井（『世間遺産放浪記』より複写転載）

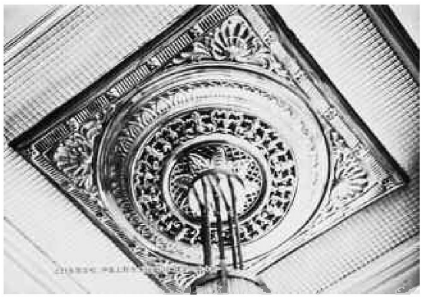


図６：伊賀上野市上野高等学校講堂の中心飾り（『洋館意匠』より複写転載）

ラフツ運動をはじめ、欧州のアール・ヌーヴォー、さらにセセッションの建築が流行していた世紀末の時期と重なっている。

図４は、松江市の「旧島根農工銀行本店」営業室の金属製打出天井板が張られた天井である[15]。設計者は不詳だが、後述する旧福岡県公会堂貴賓館の1階遊戯室の金属製打出天井板と全く同じものである。違いは天井の張り方で、島根農工銀行は廻縁にあるフラットな鏡板張りで、貴賓館は格天井の納まりになっているところである。

図５は、埼玉県本庄市の理髪店の金属製打出天井板である。竣工年や設計者名は不明であるが、撮影者の藤田洋三は、「本庄式バロックとでも呼びたい豪華な模様をプレスしたトタン天井」とその装飾性とトタン製であることに注目している[16]。

図６は、伊賀上野市の上野高等学校講堂の中心飾りで[17]、旧三潴銀行営業室の中心飾りとよく似ている。写真からはこの講堂でも中心飾り以外の天井板は判断できないが、金属製打出天井板と併用する中心飾りが学校講堂でも使われていたことを示す資料として貴重である。

６．旧福岡県公会堂貴賓館の金属製打出天井板

重要文化財旧福岡県公会堂貴賓館（図7-1）の１階遊戯室と２階食堂に金属製打出天井板を見ることができる（図7-3、7-4）。

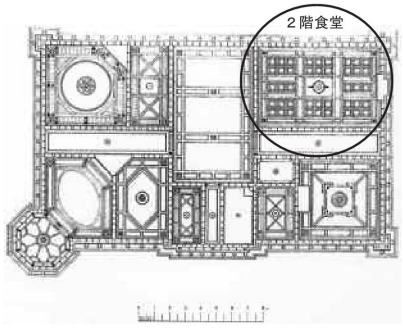
この貴賓館は明治43年の第13回九州沖縄八県連合共進会における来賓接待所を兼ねて福岡市西中洲に建てられ、共進会終了後に公会堂として利用された。設計、監督は福岡県の土木課技師三條栄三郎である。施工は地元福岡の岩崎組（現岩崎建設）が担当して、明治42年１月に起工、翌43年３月に竣工している。建築規模は2階建スレート葺き延べ床面積87坪余（263㎡）である。フランス風ルネサンス式を意匠の基調とする建築で、２階に貴賓室、談話室、食堂、寝室など、１階に遊戯室、休憩室、事務室、食堂などの諸室が配置されている[18]。

ここに見られる金属製打出天井板の図柄は、1階遊戯室

図7-1：北西から見る外観

図7-3：１階遊戯室天井

図7-4：２階食堂天井



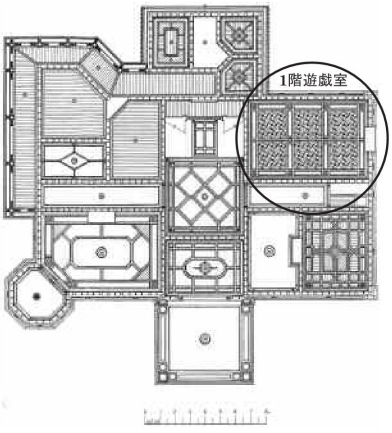


図7-2：1，2階天井伏せ図（『旧福岡県公会堂貴賓館保存修理工事報告書』より複写転載）

図7-5：貴賓室天井

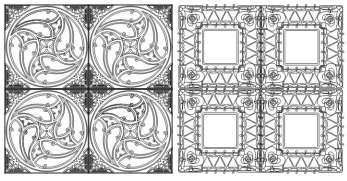


図7-6：金属製打出天井板図：左１階 右２階

図7-7：バルコニーへの通路

図7-8：階段室半円窓

図7-9：貴賓室塔屋天井

図7-10：貴賓室暖炉

図７：旧福岡県公会堂貴賓館

と2階食堂で異なる（図7-6）。双方とも90センチ四方のモジュールパネルの亜鉛引き鉄板である。藤原商店広告の使用例に「勸業博覽會諸建築物等」とあるのは、こうした共進会施設でも採用されていることを示している。

遊戯室の天井板は、パネル巾一杯の円形を強く浮き上がらせるように植物のツタと芽の図柄を螺旋状に回転させたアール・ヌーヴォーの文様である。前述の「旧島根農工銀行本店」と全く同じ天井板である。2階食堂のものは、方形を象った枠に花と枝を抽象化して浮き上がらせたアール・ヌーヴォーの文様である。遊戯室の文様とは対照的に落ち着いた印象を与えている。

この貴賓館の天井の全体は、天井画が描かれた貴賓室天井（図7-5）を最上位として秩序だてされていて、板張り格天井や漆喰天井など、部屋毎に洋風建築天井の創意工夫が見られる（図7-2）。その天井の意匠構成に加えてなぜ一層の装飾美術性を高めている金属製打出天井板の導入が計られたのかについては、この時代の装飾的意匠の背景と建築家の創造性を伺い知ることが必要である。

当時の福岡県の建築事情としては、辰野・片岡建築事務所の設計による「旧松本健次郎邸西洋館」（北九州市）が明治41年に竣工し、同42年には同事務所による「旧日本生命九州支社」（福岡市）が竣工している。前者では、木造による個性的なアール･ヌーヴォーの意匠が展開され（図８）、後者でも、鋳鉄製カウンタースクリーン、鋼鉄製階段桁、鋳鉄製手すり子、暖炉などにアール・ヌーヴォーの意匠が見られる（図９）など、装飾性の高い洋館の建設が始まっていた。「旧立花寛治邸西洋館」と「旧三潴銀行」もその中に含まれる。一方、福岡市では中洲で開かれる第13回の共進会に合わせて、路面電車の敷設が進められるなど都市の基盤整備が進められていた。

福岡県土木課に着任した技師三條栄三郎はすぐさま、この共進会会場のマスタープランや貴賓館の設計に着手している。この時は既に渡邊譲や野口孫市などが、金属製打出天井板を使ったアール・ヌーボーの意匠を実現している。このような背景から三條は、貴賓館に金属製打出天井板を使って、アール・ヌーヴォーの装飾美術天井を見せることを考えるに至ったと推察する。

７．福岡県土木課技師三條栄三郎

ここで、福岡県技師三條栄三郎（1876～1929）の足跡を見てみる。明治9年山形で生まれた三條栄三郎は、中学で4年先輩の伊東忠太と親睦を結び、その後、奨学金を受けて、蔵前の東京高等工業学校に明治27年に創設された工業教員養成所木工速成科に同29年に入学、同31年に卒業している。木工科は工業教員養成が目的であったが、建設に直接たずさわる専門技術者を育成する最初の教育機関であった。教授滋賀重列は、アール・ヌーヴォーの紹介も行っていた[19]。

図８：旧松本健次郎邸西洋館食堂（『日本の洋館』第二巻より複写転載）

図９：旧日本生命九州支社階段（左）、同スクリーン（右）

明治32年には実業学校令の公布に伴って新設された熊本県立工業学校の建築科に赴任、同34年には福岡県立工業学校に赴任して多くの建築技術者を育てている。その後佐賀県建築技師を経て、同41年４月に福岡県土木課建築主任技師として着任している。当時は多くの建築が洋風化に転じる時期ではあったが、旧三潴銀行が施工された明治40～42年頃の福岡県では未だ建築課は存在せず、建築に関する監督官庁の一切は土木課の建築技師や技手が統括していた[20]。

三條は、明治の代表的建築家妻木頼黄と在学中から親交があり、「福岡県旧県庁舎本館」の煉瓦造設計では直接の指導を得ていた[21]。一方では、洋館建築とは別に神社仏閣等の修復復原にも関係していた。こうした土木課の職務環境下において、三條はセセッション式について強い関心を持っていた。即ち、福岡県旧県庁舎本館竣工時の「福岡日々新聞」のインタビューで「ルネサンス式以上のものができない以上、矢張り古い時代のものでもそれによる外はありません。處々にセセッション式を加味したのは云わば現代を象徴したつもりで、後年、此の建物がルネサンス式でもセセッション式の加味してあるのを見て大正初期頃の建築だと云うことが分かるのです」[22]と答えている。

図10：福岡県旧県庁舎本館階段室（「洋館意匠」より複写転載）

図11：三潴銀行階段室手摺

三條は、福岡県旧県庁舎本館で大成するセセッション式を加味した室内意匠を、「旧福岡県公会堂貴賓館」で先駆けて見せている。特に２階階段ホールから玄関ポーチ屋上のバルコニー（当時の呼称は運動所）に続く狭く設定された通路が、腰壁を付けずに天井まで漆喰が塗られ、その正面上部に丸窓を穿った空間は白眉である（図7-7）。階段室の半円窓と白い窓台（図7-8）、貴賓室塔屋の白い天井と丸窓（図7-9）、白い大理石に平面彫装飾を施した暖炉（図7-10）、白いタイル貼りの浴室、さらに外部腰石の白いタイル貼りなどもセセッション式を敷衍した装飾的な意匠である。こうした貴賓館の繊細な意匠は、建築設計に対する自らの創造的感性を表現する機会となったことに疑いはない。

同様に、三條のセセッション式は旧県庁舎本館の階段室の意匠とその細部にも表れている（図10）。特に手摺の意匠に表れた伝統的な造形を取り込んだ装飾的感覚は、旧三潴銀行の手摺（図11）の意匠感覚と同種の印象がある。

当時の三條栄三郎は、パリから取り寄せたアカデミックな建築装飾の書籍や雑誌等によって建築意匠の発想を膨らませ、さらに独自の創意工夫を繰り返していたと伝えられている[23]。このような設計姿勢が、フランス風ルネサンス式の建築意匠を巧みに扱い、新しい装飾美術の創造を目指したアール・ヌーヴォーや古典主義からの分離を促すセセッション式などの新しい空間意匠が随所に見られる所以である。

8．旧三潴銀行の設計者像

旧三潴銀行の設計者像について、論文「その１」では、福岡県土木課技手西原吉治郎が建築設計に関わった可能性を推察した。西原は軟弱地盤における地業や石造風セメント漆喰壁の建築工法、さらに古典系ルネサンスやアール・ヌーヴォーの装飾意匠で旧三潴銀行との関わりが考えられる。

一方、三條栄三郎は、石造風セメント漆喰壁の建築工法、さらにアール・ヌーヴォーの装飾やセセッション式の室内意匠において旧三潴銀行との共通性を持っている。即ち、「旧三潴銀行」の主要天井全面に白く塗装されたアール・ヌーヴォーの金属製打出天井板と一体になった白い漆喰壁と灰白のリノリューム床の室内意匠は、優れてセセッション式の感覚である。対して、西原が設計した「旧立花寛治邸西洋館」（図12）からは、アール・ヌーヴォーへの関心はみられるものの、セセッション式の空間意匠の感覚は伝わってこない。

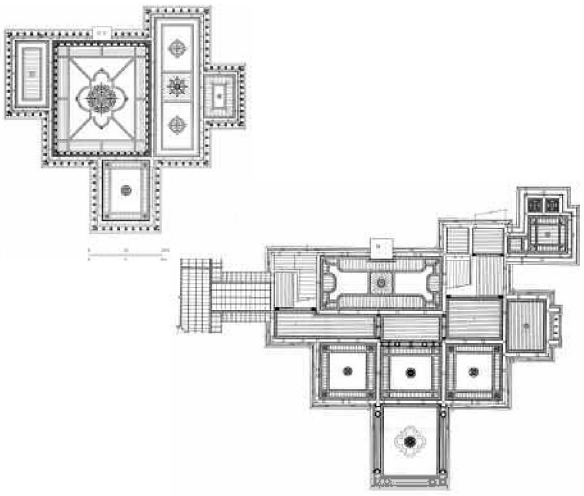


図12：旧立花寛治邸西洋館天井の装飾的特徴（「名勝松濤園内御居間他修理工事報告書第１編」より複写転載）

こうしたことを考え合わせると、「旧立花寛治邸西洋館」「旧福岡県公会堂貴賓館」とほぼ同時期に工事が進められてほとんど同時に竣工した「旧三潴銀行」の設計者像は、建築意匠設計の西原吉次郎と室内意匠設計の三條栄三郎に絞り込まれるのである（図13）。

9．まとめ

輸入金属製打出天井板の特性と室内意匠の設計者像は以下の通りである。

①金属製打出天井板は、藤原商店が豪州から輸入販売した装飾美術的工業製品と同等のものである。

②藤原商店が販売した豪州製金属製打出天井板は、「帝國ホテル」で最初期に使用され、明治末期の洋館で多く利用された。

③渡邊譲設計の「海軍参考品陳列館」が、「建築雑誌」や「明治工業史」でも紹介されるなど、この製品は明治末期の洋館建築素材として重要な位置づけにあった。

④渡邊譲は、貴族・ブルジョアジーの邸宅のなかでも第一級と認められた「前田侯爵邸」にも金属製打出天井板を用いるなど高い評価を与えている。

⑤藤原商店の広告によれば、金属製打出天井板は優美でかつ廉価であり、継ぎ目が目立たず数本の釘で取り付けら

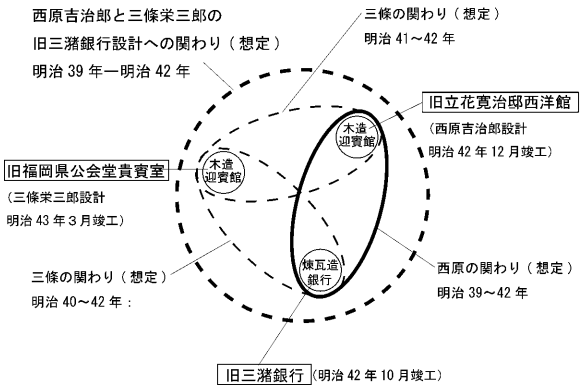


図13：旧三潴銀行の設計者像

れ彩色ができるなど、技術者に愛好された。

⑥アール・ヌーヴォーに造詣が深い住友営繕の野口孫市が設計した「旧田辺禎吉邸」には、金属製打出天井板と格縁を融和させた美意識が見られる。

⑦旧三潴銀行の金属製打出天井板を使用した白い室内意匠はセセッション式である。

⑧アール・ヌーヴォーの金属製打出天井板と、セセッション式の室内意匠を同時に実現しているのは、ほぼ同時期に同地域で施工された旧福岡県公会堂貴賓館と旧三潴銀行である。

⑨アール・ヌーヴォーの金属製打出天井板を用いてセセッション式の室内意匠に関与したのは「旧福岡県公会堂貴賓館」の設計者の福岡県技師三條栄三郎であると推察される。

参考文献

１）大川市指定文化財調査報告書　旧株式会社三潴銀行、大川市教育委員会、平成9年3月

２）大川市誌、福岡県大川市役所、pp.492-493、昭和52年12月

３）建築雑誌、第231号、広告頁、明治39年

４）建築雑誌、第262号、広告頁、明治41年

５）建築雑誌、第277号、広告頁、明治43年

６）建築雑誌、第286号、広告頁、明治43年

７）建築雑誌、第260号、p.381、明治41年

８）明治工業史、社団法人工学会、pp.683-684、昭和2年4月

９）建築雑誌、第22輯第263号、pp.465-468、明治41年

10）藤井恵介、本郷前田侯爵邸と東京大学、東京大学総合研究資料館ニュース32号、 1994年10月

11）建築雑誌、第261号、p.375、明治41年

12）藤森照信、日本の洋館第２巻 明治編Ⅱ、講談社、p.18、2002年11月

13）田邊淳吉、西濠州の住家、建築雑誌、第22輯第253号、pp.23-33、明治41年

14）旧田辺禎吉邸、坂本勝比古、日本の建築［明治大正昭和］、三省堂、p.121、昭和55年９月

15）長谷川堯、洋館意匠、鳳山社、p.152、昭和51年７月

16）藤田洋三、世間遺産放浪記、石風社、p.85、平成19年4月

17）前掲15）、p.183

18）重要文化財旧福岡県公会堂貴賓館保存修理工事報告書、財団法人文化財建造物保存技術協会、昭和62年９月

19）日本建築学会編、近代日本建築学発達史 復刻版下、文生書院、p.1822 、平成13年12月

20）石井邦信、福岡における近代建設企業の成立過程について、日本建築学会論文報告集代69号、p.871、昭和36年10月

21）福岡県教育庁舎（旧福岡県公会堂）について、西日本文化、通巻147号、財団法人西日本文化協会、pp.17-22、昭和53年12月

22）福岡県旧県庁舎本館等実態調査報告書、日本建築学会九州支部、pp.4-5、昭和58年３月

23）母里喜久、三條栄三郎その足跡、西日本文化、通巻149号、財団法人西日本文化協会、p.20、昭和54年3月